

V 研究旅行における生徒の健康管理に対する認識

服 部 祐 子

研究旅行に引率して行き、感じたことである。ふだんなかなか自分の健康状態など気にしないような者でも場所がかわり、生活がかわると旅に出たという解放感とは裏腹に一種の緊張を感じるのであろうか、生徒は自分の健康状態に神経質になるようなところがあるようだ。例えば、少しの倦怠感や頭痛でも発熱を心配して検温したり、少しの腹痛であっても安易に薬を要求してきた。そのような状態が決して健康管理の重要性の認識をもったとは言えないが、異常を訴えて来た者に対してはふだん忙しさに粉れてなかなかできずじまいである保健指導を処置しながらおこなったり、またその異常を訴えて来た生徒たちに旅行中に睡眠時間や食事に気遣うような態度がみられたことは、とても良かったと思う。また旅行中に自己健康管理をしてもらおうと班ごとに健康観察カードを持たせ、朝、夕

の個々人の健康状況を生徒自身には握させた。学校では、健康観察は試みておらず、試みたとしても恐らく徹底はしないだろうが、旅行中は積極的に行われ調子の悪い者については早目に処置をとることができた。日頃健康管理と言われても健康な状態で同じリズムで同じ環境で生活していればそれ程、健康がそこなわれることはないはずである。だから学校でも生徒に日頃の健康管理が大切だと声を大にしても生徒の中に健康管理の重要性はあまり意識づけられないと思う。しかし、日常生活とは異ったリズムと環境の中での3泊4日は生徒に旅行の目的を達成するためには、健康と安全が必要だという認識のもとで健康管理の重要性の意識づけをするには、非常に良い機会であったように思う。